尾瀬

岩波写真文庫　33

岩波写眞文庫 33 尾　瀬

監修・写真　武田久吉　　編集　岩波書店編集部　岩波映画製作所

菖蒲平から望む燧ヵ岳

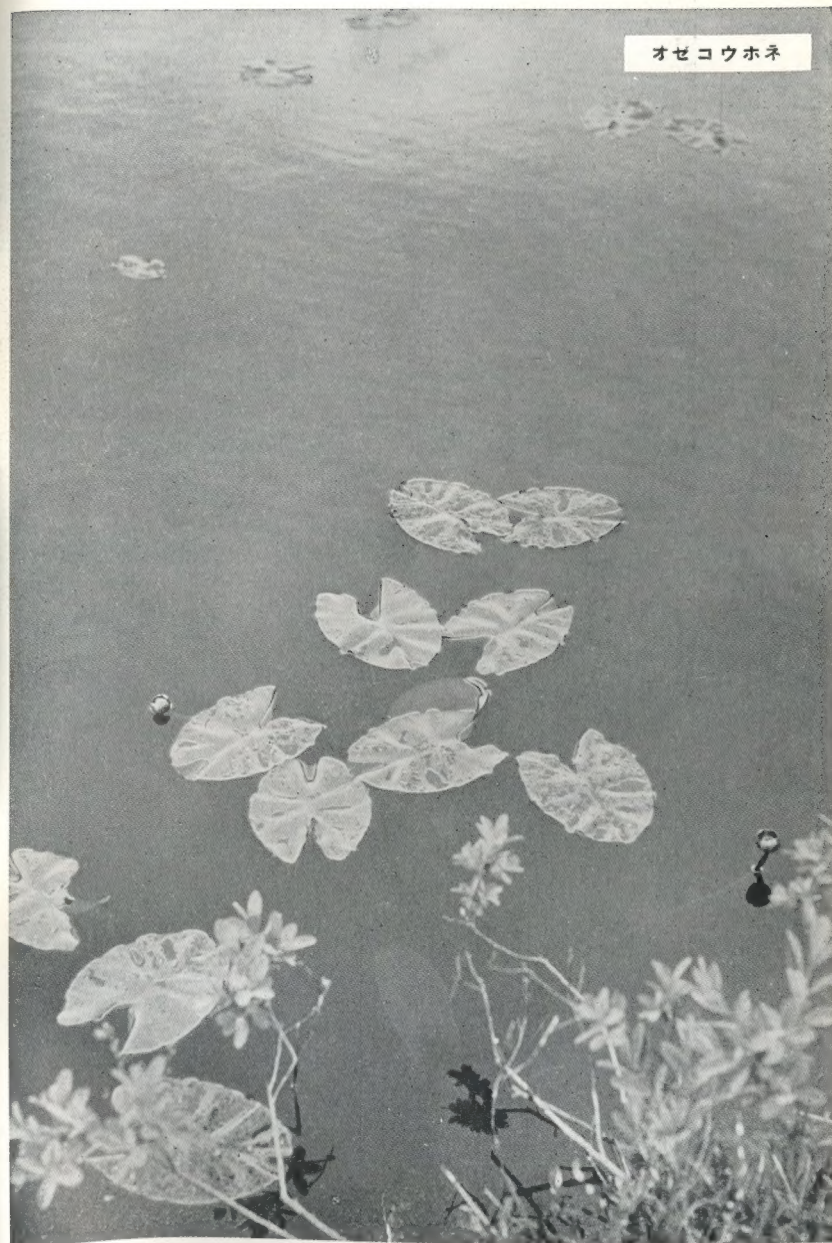
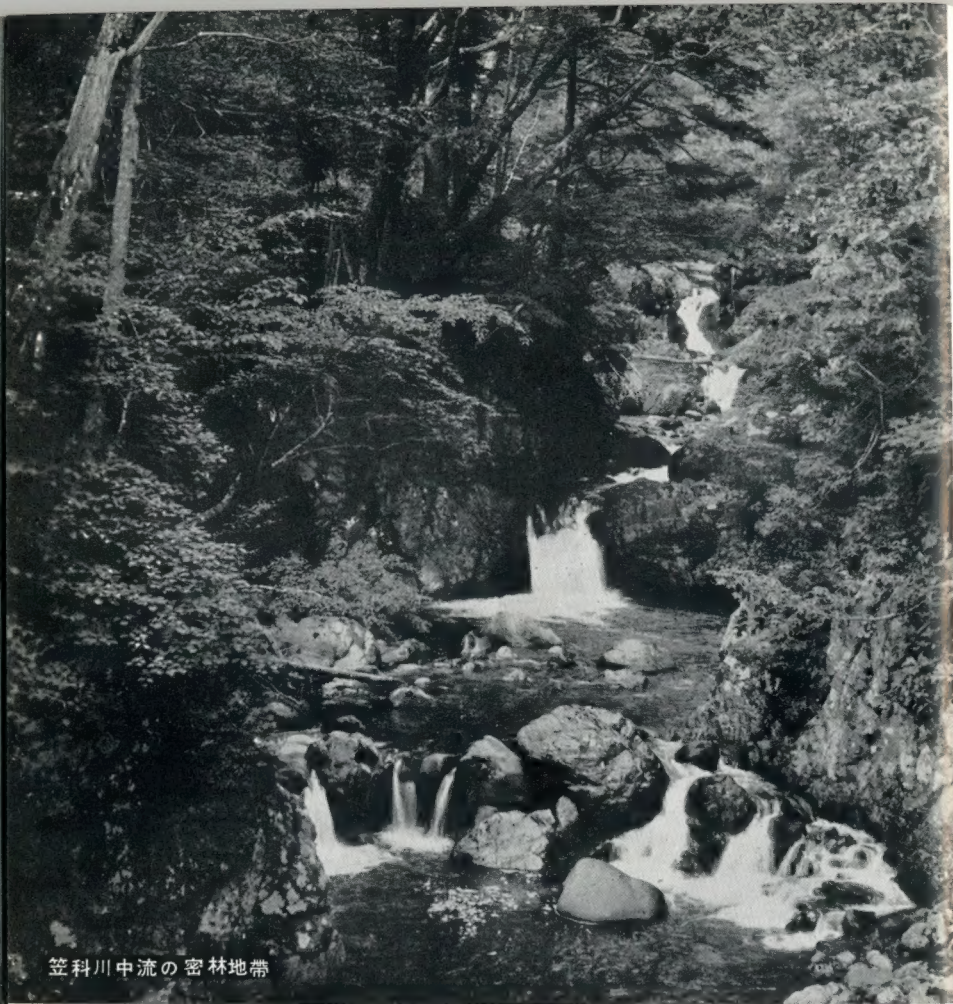
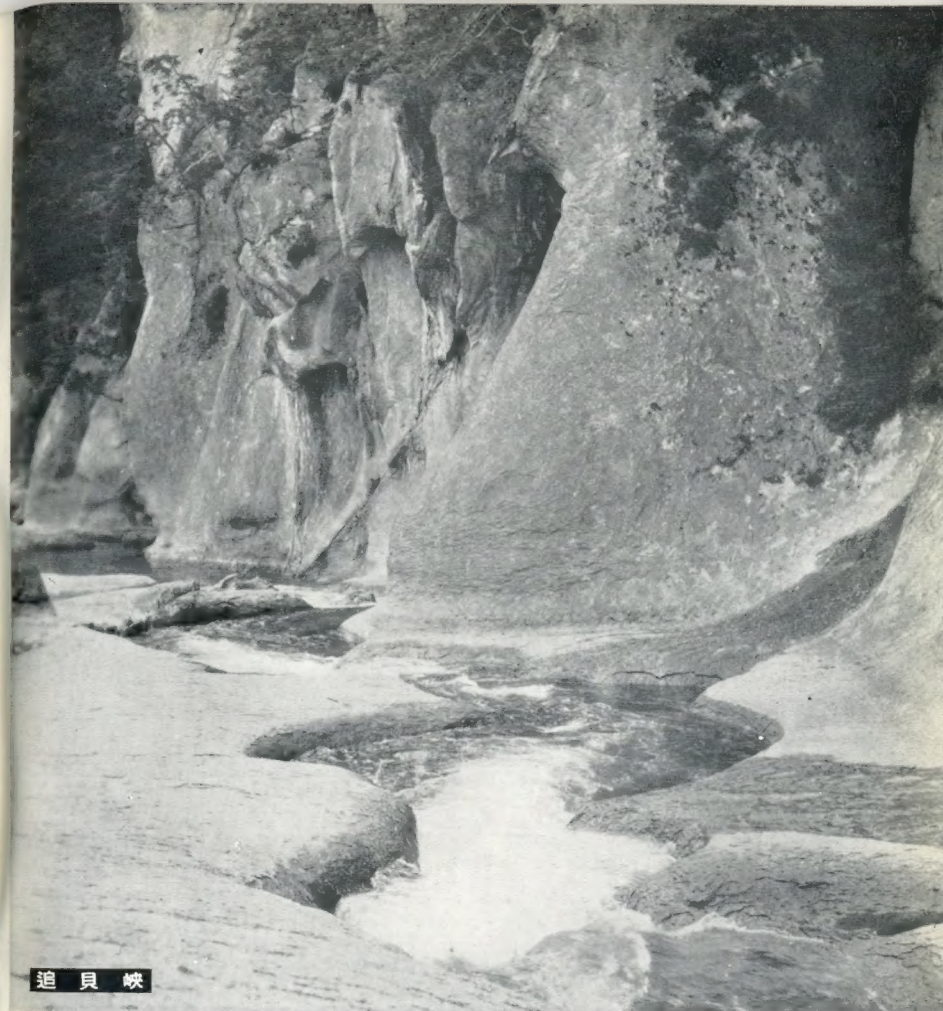
そこなわれたこの国の自然を嘆く声が一方に起って緑地運動その他の提唱がなされる他面、ここ尾瀬の秘境は、世界にもたぐい稀な大湿原尾瀬ヵ原をはじめ、周辺をかこむ山岳、森林、溪流、瀑布、湖沼がいくたの珍しい動植物とともに、水力発電の犠牲となり水底に沒しようとしている。私たちはその賛否かまびすしい議論に加わる前に、まずこの祕境を探ってみよう。そこには自然の美が惜みなく展開されている。と同時に、たゆみなく生成発展しつづけてやまない自然の活動が、一木一草の目にもとまらぬ動きを通じ、壮大な〝実験〟をくりひろげて私たちを待っている。

目　次

定価100円 1951年5月25日第1刷発行 1957年12月20日 第10刷発行 © 発行者 岩波雄二郎 印刷者 米屋勇 印刷所 東京都港区芝浦2ノ1 半七写真印刷工業株式会社 製本所 永井製本所 発行所 東京都千代田区神田一ツ橋2ノ3 株式会社岩波書店

オゼコウホネ

追貝峡

尾瀬まで

群馬県前橋市から北に八里余赤城山のすそを右に望みながら、上越線の鉄路が、しだいにするどさをまして白く光る利根川の流れと、互にもつれては離れ離れてはもつれあいながら、やがて一面の桑園に囲まれた沼田町に近づく。その手前で、片品川は利根本流にそそぎこんでいる。私たちは、桃源境をたずねて溪谷をわけ入った夢ゆたかな中国の昔びとのように、片品川のうねりのままに、山ふところに入ってゆこう。いまは大型のバスの通う川沿いの道を、土岐氏累代の城下町だった沼田をあとに、片品川をさかのぼってゆくと、いつしか西岸の山が行く手をせばめて、近年その名のたかまった峡谷のある追貝に達する。このあたりは河床も河岸も美しい石英斑岩から成り、ことに侵蝕されつくした河床の奇観は、名瀑吹割の瀑や、鱒止めの瀑とあいまって、祕境尾瀬へのプロロウグたるにふさわしい。さらに北上すること一五粁ほどで、街道最奥の聚落である戸倉に来る。片品川は部落の南で二流に分れ、東を片品川の本流、西を笠科川とよぶ。昔は西が本流とされ片品の名も笠科からの転訛といわれる。

鱒止めの瀑

笠科川中流の密林地帯

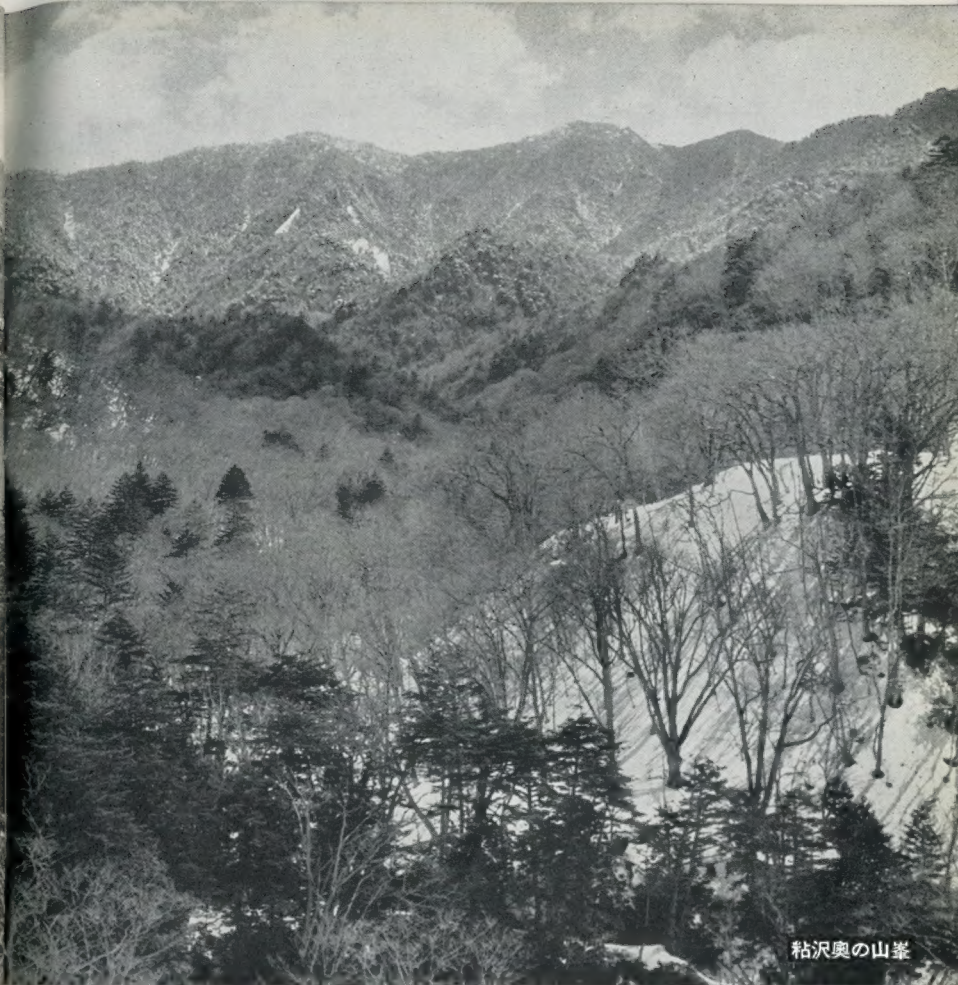
雪中に冬眠するヤマネ

ヤ　マ　ネ

岩魚釣の名手

粘沢奥の山峯

粘沢から東を望むと，ピラミッド型の毘沙門山がきわだって高く，その右手に燕巣山につづく国境の連山が，おり重なっている.

尾瀬の珍獣ヤマネは，掌に入るくらいの大きさにまるまって冬眠し，暖気が訪れれば起きだすが，寒いとまたまるまって，雪の上にすら落ち，体温でとけた穴の中に沈む.会津側には，名物イワナ釣りの名人が多い.

戸倉部落から、片品川本流にそって遡ること八キロメートルばかりで、東の方毘沙門山の山腹に発源する粘沢（根羽沢）がそそぎ、さらに数百メートル上流には中の岐沢が来り合する。片品川の発源する山々は、支流笠科川の流れ出る笠科山、大行山、富士見峠等とともに、いずれも私たちの採ろうとする尾瀬特別区域の南面をなし、斧を加えられたことの少い密林にとざされている。戸倉から北上して縣境を越え、えんえんと会津地方に向う一筋の縣道は、明治中年以後ほとんど廃絶して、この辺が国立公園になるまでは、尾瀬の主といわれた長蔵小屋の主人の手で修理されていたものだったが、幕末から明治初年にかけては会津側と群馬側の商工業地をむすぶ重要商路で、馬背につまれてくる会津の米や酒が、群馬の油や塩と交易された道である。

粘沢、中の岐沢を右に見ながら、なお道を北にたどると、けわしい斜面をあえぎ登った後に、やがて平坦に近い山頂を北に下ると、思いもかけず展開するひろい盆地、満々と水をたたえた沼。私たちはいよいよ目ざす尾瀬に足をふみいれたのだ。会津街道は沼のふちをそのまま北へ伸び、太古に沼の水位の高かった頃は沼の一部をなしていた湿原の中を一筋に、もう福島縣南会津郡の一部である、檜枝岐村に入ってゆく。沼のあたりは本州の脊骨の一環であり、ここを境に、水はことごとく日本海に向って流れてゆく。往古、群馬縣の側から登っても福島縣の側からわけ入ってもいずれも山上に到って沼に出あうので、一帯を沼山とよんだらしく、今にその名が残って、北から入る峠を沼山峠とよび、一方私たちのたどって来た南口の峠を尾瀬峠（三平峠）とよんでいる。尾瀬峠の頂上に立つと、一望ひろびろとした笹原で、ワセの原ともよばれ、ソウシカンバやオオシラビソなどの若木も、すくすくと伸びている。尾瀬に風致を添える名峯燧の頂が、木の間隠れに望まれるようになるのもここだ。標高二三四六メートル、本州にはこれより北に、かかる高峯を見ることができない。一方、尾瀬沼の西北から流れでる沼尻川は只見川の源流となる。沼の西方四粁あまりに、尾瀬ヵ原が展開する。いま私たちが尾瀬と総称する秘境の、中心をなすのはこの尾瀬沼から尾瀬ヵ原にわたる一帯である。尾瀬ヵ原の、南を限る尨大な火山脈は、その西を限る至佛山につ いで古く形成されたもので、西方鳩待峠に向っておもむろな傾斜をなし、北面は原に向い南面は笠科川に向って、たくさんの沢をひらいている。

会津駒ヵ岳から見た燧ヵ岳

燒山峠からの南望

尾瀬の北の入口ともいえる沼山峠のあたりは、また燒山峠ともいわれる。尾瀬沼にそそぐ流水のうち、もっとも大きい大江川は、峠の東にあたる大江山に発し、燒山沢や清水俣を合せ、奥沢とも合して沼に入る。沼山峠は、尾瀬沼に牛が主となっているという伝説から、近年まで牛の通ることを忌み街道に牛を通さなかったのみか、牛という言葉を口にすることさえはばかった。伝説もさることながら、おそらく、関所や、官許の駅伝によらない交易路が繁昌して、諸国の人民の間に、自由な交易路がひらけては困る、封建時代の爲政者の深い用意が、こんなところにもかくされていたのではあるまいか。封建的な支配がくずれだした維新前、ぬけ目のない上州商人が、禁制の牛を使って交易をし、江戸奉行に罰せられたという話も、のこっている。

雪の燒山峠

燒山峠から南を望むと，尾瀬沼の南を限る低い山脈がよこたわる外に，荷鞍山，白尾，皿伏山がならび，中景には沼の東端が白く光ってひろがっている．笹の多い峠の斜面に，すくすくと伸びているのはエゾマツの若木，この木の自生するのは，わが国では北海道をのぞくと，ここにしか見られない．斜面は南向きであるのに，雪どけはおそく4月末まで，スキーを楽しむことができる．

燧ヵ岳を，北方にあたる会津駒ヵ岳の肩から望むと，前景から中景にかけては，大津岐峠へつづく山稜が介在し，その山腹には笹が密生しているが，ところどころ空隙らしく見えるのは，積雪のおそくまで残る窪みである．点々と立つ針葉樹はこのあたりの山地に多いオオシラビソであるが，土地の方言ではツガとよぶ．燧ヵ岳山頂には狙嵓と柴安嵓の二峯が，いちじるしく聳える．

燧ヵ岳から見た尾瀬沼

尾瀬沼

この沼にオゼ沼の名がつけられたのは何時からのことか判然としないが、古くは寛文六年（一六六六年）附の序文をもち保科正之により編集された『会津風土記』に、「小瀬」の名で現れている。しかし、これは尾瀬と書くのが正しいといわれ、そのゆえは、治承の昔（一一七五年）源三位頼政に擁せられて挙兵した高倉宮が、宇治平等院で敗戦後、越後の住人小国右馬頭頼之をたよってかの地に落ちのび、沼田から戸倉をへて沼のほとりに滯在した時、近臣の尾瀬中納言頼實が死んだので、屍をここに葬ったのが、尾瀬の地名の由来であるという。しかし、これももとからの地名に後世附会した伝説で、もともとオゼとは、奥上州の古い方言で、卑湿地を指したものであり、それに小瀬または尾瀬の字をあてたと考えるのが妥当であろう。しかし、この地に尾瀬中納言、その兄といわれる尾瀬大納言、あるいは安倍貞任の残党などの伝説が多く残っていることは、意外な山奥の尾根づたいに往来した、昔の交通や土着の仕方が現在の私たちの観念と相当ちがっていることを示していよう。ちなみに、奥日光一帯には、いわゆる平家の落人の子孫と伝えられる部落も多い。

このような伝説のくさぐさをも祕めて、長径二二〇〇メートル、短径一二〇〇メートル、平水面海抜一六六五メートルに及ぶ尾瀬沼は、岸うつ波も高からず明朗な景色を形造って静かにひろがっている。水深は、もっとも深いところで八・五メートルといわれ、岸辺をとりかこむ五、六の沢から清水があいあいとそそぎこむほか、東南岸には水中に湧水のあることも発見された。

長蔵小屋裏から望んだ三平峠方面

東岸釜っ堀湿原が沼と接するあたりには，沼沢植物のミツガシワと，北国の水中にのみ見るミズドクサが繁茂している．はるか右手には，皿伏(さらぶせ)の山頂．沼の左手には檜の突出．

檜の突出(ひのきつきだし)．突出とは半島のことである．高さ約2mのこの突出は，東岸に峙つ檜の高山のすそにあたる．近年意外にも多くの湧水が発見されたのはここから南岸にかけてである．

桧のつきだし

釜っ堀から日崎山と景鶴山の遠望

沼の東岸長蔵小屋のほとりから西を望むと，手前は釜っ堀湿原，沼のはるか彼方に突立つ景鶴山の岩峯の左には，雪に輝く日崎山が望まれる．6月初，樹々はまだ芽ぶかない．

沼の北岸，浅湖(あざみ)湿原の西で沼が岸にふかく凹みこむあたりを大入洲(おおいりす)と呼ぶ．うっそうたる針葉樹の密林の立つ岸には，ナガハヤナギが浅瀬のアシとともに夕映えに美しい一時．

大江明正氏撮影

大入洲の夕照

湿原に続く樹林

古い火山群の噴出活動の終った後、最後に噴出した燧ヶ岳の熔岩によってつくられた堰止湖が尾瀬沼である。その南岸は、尾瀬峠につづく低い峯が山足を水にひたすが、北岸には、温和な姿の燧ヶ岳のすそがゆるい傾斜をなして臨みやや隆起した森林と森林との間には、浅湖、押出、頽雪っ窪などの湿原が発達し、その中をぬって清く小さい流が、沼へそそぎこんでいる。また東南岸にも、同じように湿原が岸につづき、早稲っ沢などの流が、ここに流れこんでいる。沼のなかには、弁天岩という小さい岩が頭をだしているほかには、島らしいものもなくて、浅瀬には沼沢植物や水生植物が見られる。わけてもいちじるしいのは、背の高いオオフトイと、水面に葉をうかべるジュンサイで、この二種とともに、やや水の深いところに根をおろす沈水植物のホザキノフサモがある。沿岸の浅瀬には、沼沢植物のクロバナロウゲやミツガシワとともに、ミズドグサとミズスギナが、そして泥沼地にはオオカサスゲを見ることができる。これらの茂る岸をこすと千古の密林がつづいている。

ハクサンシャクナゲ

ミネザクラ

沼の北岸押出し湿原の背後に立つ樹林は，燧ヵ岳の山腹にまでつづく密林の一端である．群をぬいて高い大木はエゾマツ，円錐形のがオオシラビソ，そこに，女性的なコメツガや，シラカンバに似たソウシカンバの姿もまじって，亜高山帯林をなす．

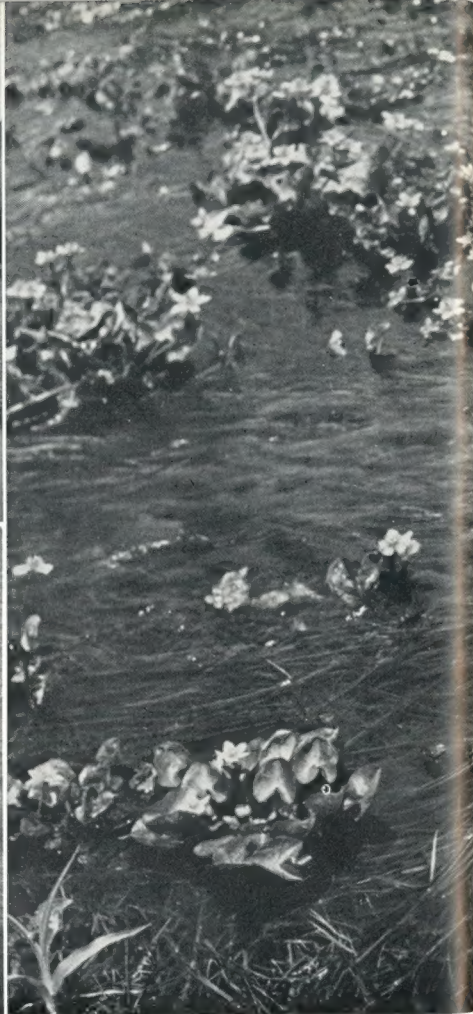
沼のふちにはミネザクラや，それに似たチシマザクラの花も見え，林縁にはハクサンシャクナゲなどの陸生植物が沼沢植物のアシと共に茂っている．

渓流の縁に笑うリウキンカ

尾瀬沼をめぐる湿原

尾瀬沼の周縁には、もとは湖底であったと推定される泥土の上に、水蘚湿原の発達しているのが、随所に見られる。湿原はまた諸方で俗に田代とよばれており、土地によっては、これを山の神の遊び場だとか、天狗が角力をとる土俵だとかいう伝説を生むこともある。沼の東南岸には早稲っ沢にそって、樹林にかこまれた湿原があり、檜の沢の出口にはむしろ泥沼性の小湿原が見られ、長蔵小屋の南には釜っ堀の湿原がある。さらに沼の東北隅につづいて奥っ沢の湿原、それに連なる大江川両岸の長大な湿原、その西には浅湖の奥ぶかい湿原がひらけている。更に西岸の小沼、その南にあたる治左衛門池のまわりにも湿原がみられる。またこれらと趣を異にした山上の湿原が沼の南岸を限る山脈の一七三〇メートル余もあるところにひろがっている。東西五〇〇メートル、南北二五〇メートル、その北縁は大清水に向って傾斜し、南縁は片品川の源流滑沢の源頭にゆるい傾斜をもって臨んでおり周辺は深い森林におおわれる。

砂浜から三平峠方面を見る

沼のジュンサイ

さかんな夏の初め，雪消の水はどっと沢にあふれて矢のように沼へむかって走りだす．渓畔をかざるリウキンカが，ほとばしる水にその茎をゆられながら橙黄色の可憐な花をつけている．花は径約3〜5cm 5枚の萼片が，花弁のように見えるが，花弁はない．

三平峠を北に下った沼の縁にきれいな砂浜があって土地の人はここをすなっぷうと呼ぶ．その北端にはわせっ沢が注ぎ，樹叢を隔てて早稲っ沢湿原が横る．

浅湖湿原の一部

浅湖湿原の沼に接するあたりは，半ば水上に浮く半島状をなして，人が乗れるほどの厚みはないが，6月初旬には，クロバナロウゲの間に，リウキンカやミズバショウがさく．

沼に舟を浮べて浅湖湿原を水上から見ると，先端にはミズドクサが密生し，その間にオオカサスゲなどの沼沢植物がとりかこまれて，やがて沼を湿原化してゆく階梯がわかる．

湖上からみた浅湖湿原

浅湖湿原から燧ヵ岳を仰ぐ

浅湖の湿原は，名のごとく昔は浅い沼だったのが，湿原と化したもので，両岸の丘の上には森林が発達し，下生には笹が多い．沼の北岸ゆえ，燧ヵ岳がちかぢかとあおがれる．

浅湖湿原にはスゲの類が多く，夏はまたコバイケイソウの姿が多い．だが花をつけるのは稀である．湿原の西につづく丘と森林には，写真の右手にあるようなエゾマツも多い．

浅湖湿原の西を限る丘陵

北岸のある所では、沿岸からクロバナロウゲが年々進出して、水中に張る地下茎は、はじめこそ浮いているが、やがてその上に泥土や枯葉がつもり、しだいに沈下しながら先へ先へとのびてゆく。その際しばしば、岸から離れて深みに生えていたオオフトイの群をとりこにし、それと合流しつつ、またその区域をも閉鎖しつつ、湖心に向ってのびてゆくから、水面はしだいに縮まり、こうして沼は沼沢へと推移してゆく。このように沼沢化したところには、この地では自然水蘚の発生をみる。水蘚は多数集合して生ずるので、水分の吸収に根の必要がなく、また枝か茎の先端があれば、それから無限に生長を続け、わずかではあるが年年上へ上へとのびるので、水蘚層の厚さは増し、幾十年幾百年の後には、ついにこの層は沼の底にとどいてしまう。

倒木上に生じた樹木

そして底をつくと同時に、水面上の高さを増すことになるが、一方茎の下部は枯れ腐朽してついには泥炭化してゆく過程をとる。もちろんこの過程が進行するには非常に長い年月をへなければならぬが沼の北岸ではその過程を示す。

沼の湿原化

上の写真の右に続く風景

水蘚湿原の中には，普遍の森林植物は立ちにくいのであるが，時として附近の森からたおれこんだ樹木の腐朽した上に，いつしか種子がおちて，若芽をふき，一列をなして育つ様がみられる．しかし，これらの若木も，大木になることはむずかしい．

尾瀬沼の北岸では，湿原化の進行する段階がよく観察出来る．これは頽雪っ窪湿原の一部で，水中に半島状に浮いた棚から，湿原化が進行してゆく．

湿原のまわりは、森林にかこまれるのが普通であるが、高地であるから、亜高山帯に属する森林、すなわち、コメツガ、オオシラビソ、ネズコ、エゾマツ、ヒメコマツなど、常緑針葉樹を主とした亜寒帯性の樹種が多く、うすぐらい林相が、いっそう沼のほとりの神秘さをますが、そのなかにまじって、ソウシカンバの美しい幹も針葉樹に交って立っている。そして、湿原の端にちかく、森の切れたところには、これらの姿をうつす潴水が静かにたたえられてもいる。特異な階段状の湿原は、北岸に見られる。大入州とよばれる岸の入りこんだあたりに、また、その西にあたるおんだし、頽雪っ窪の湿原、沼尻平の扇状の湿原などに見られるのがそれで、その一部には上下に階段状をなし、且つ小池を宿しているところがある。そこには季節の変化に応じてさまざまの草木を生じ、また泥土の多少によって、生える植物に差異も見られる。田代すなわち湿原を、昔の人たちは、神様が作った田圃だと考へて、斯様な地形を神秘視して、それを礼拝して豊作を祈願する例が諸方にある。

階段状の湿原

なでっくぼ左岸の傾斜のある湿原

田毎の月もかくやと思わせる，この階段状湿原の景観は，頽雪っ窪の傾斜に発達した湿原の一部にミズゴケが異状に発育して，その底に水をあつめてつくりあげた池である．ま近かにそびえる燧ヵ岳の影を写して，この池は年中かれることがない．

池のほとりには，ヒメシャクナゲなど，水蘚湿原に通有の，小さい灌木なども生育して，これまたやさしい花をつける様子が，所々に見うけられる．

初夏の大江川

湿原の植物

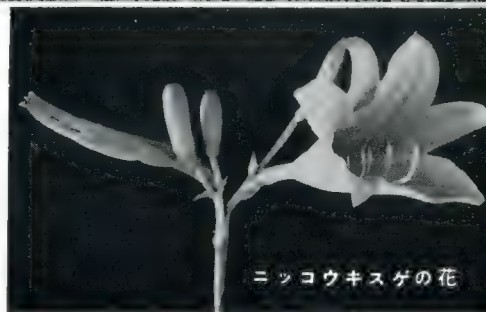
水蘚湿原は、普通の壌土よりもはるかに酸性度がつよいから、ここに生えうる植物は特殊のものに限られる。森林植物は普通の状態では生えることができず、わずかに周辺の森から倒れた朽木の上に種子が落ちその上に一列に樹木の芽生えが見られるが、それも成長して根が湿原に入るころは、生育が阻害されて大木になることは稀である。早稲っ沢湿原の西端で、沼の縁の、ナップウという砂浜に接する所に、背の低い樹木の並ぶのも、多分打ち上げられた朽木の上に立ったものであろう。ただ川そいの湿原では、水流によって土砂が運ばれ、また洪水の氾濫で低地には土のたまりを生じなどして、植物の生育にも条件の差を生むことはある。だが大体において酸性植物でないと十分の生育はみられず、しかも生育に良好な条件は存在しない。だから旺盛な植物相は期待できず、矮小なものが多く、せいぜい灌木程度を限度としている。しかしまた逆に、普通の土壌にはみられない珍らしい植物の景観を呈するのもここだ。

水芭蕉の花

実をつけた水芭蕉

絵画や写真などに，よく題材にえらばれるミズバショウの異様な姿は，雪どけの水にあふれる大江川のほとりや，燒山下に数多く見ることができる．上品な白い花と見えるのはじつは花でなく，ほんとうの花は，棍棒状の茎の上に，無数につき，その心棒をとりまいている純白の佛燄苞という匙状のものが，私たちの目をひくのである．やがて花がすむと，この苞は朽ちてしまい，そのあとに長大な葉がのびだして，バショウの葉をおもわせる．

ニッコウキスゲの群落

ミズバショウとともに，尾瀬の湿原をかざる代表的な花の一つであるニッコウキスゲは，日光をはじめとして，諸所の高山にも群生するが，ここでは沼のふちをかざって，見わたすかぎり咲きほこる．しかもこの花は，たった一日のいのちでしぼんでしまうのだが，蕾が次々と咲きつぎ，夏中あとをたたない．花は代赭色で，6個の花被片のうち，内側の3個が花弁で他は萼片である．

ニッコウキスゲの花

尾瀬に夏の初めが訪れる頃から、湿地にはミズバショウの白い兜形の頭があらわれる。黄色いリウキンカの花が雪どけの流の緣に咲くのもその頃だ。ショウジョウバカマやヒメイチゲが紅や白の花で湿原を色どるのも見られる。七月に入って花の咲くギョウジャニンニクの新芽が、オゼビルとよばれて、和物として村人の食膳に上る夕べもある。七月に入ると目まぐるしいほどの花ざかりだ。一日一日とのびる草が、大江川のひろい湿原をおおいかくし、ワタスゲの白い毛が、鳥毛の槍のように風にふきなびいて壮観である。七月初旬から八月の中旬にかけては、尾瀬の花時で開花期のくるのがおそいこの山奥では、ひとたび花がひらきはじめると、一週間毎に花の種類が変り、一帯の色が、たちまちにして変化してゆく。湿原植物は特殊なものが多い

ワタスゲの群落

ワタスゲの花

ワタスゲは，諸所の水蘚原に見られる．細い茎の先につく白い綿のようなものはしばしば花かと見まがうが，じつはこの草の果実の下に生える毛であり，本物の花は，雪の消えた頃，前年の葉の枯れた間から細い茎をたて，その先に目だたない穂をつけて咲く．やがてその花が，人知れず散ってしまったあとに，このおおらかな綿毛の群が湿原をおおうように，のびだしてくるのだ．

が、それも尾瀬沼周辺の湿原と、尾瀬ヵ原とでは必ずしも同じではなく、どの湿原の一部をとっても、それぞれの特色をもっているのがわかる。湿原でも、そこを貫流する川の流れが運んできた泥土のたまったような場所を好むものもあれば、中には水生植物でなくても水の中に半ばつかりつつ伸びるものもあり、反対に湿原の森林と接するやや乾燥したところをのみ好むものもある。大江川に沿う緩い傾斜にひろがる湿原をとってみても、湖面に近いミツガシワクロバナロウゲ、ヤチスゲなどの混成群落につづいて、ヤチカワズスゲ、ハリスゲ、オニナルコスゲ、カワズスゲなど莎草が主となり、やや乾燥の度をましたところに、ヌマガヤを主とする湿原がみられる。そしてさらに乾燥したところにニッコウキスゲの群が生じてくるという順である。

ヒオウギアヤメ

コツマトリソウ

尾瀬でアヤメとよばれるのは，このヒオウギアヤメで普通のアヤメは一つもない．アヤメとちがって茎に枝をもち，葉も幅がひろく，檜扇に似てその名がある．花も内側の花被片は短く尖る

コツマトリソウは尾瀬の花でもっとも可憐なもの．花弁は皆一つに盆状にあつまり，そのふちだけが浅く7裂し，雄蕊も7つそなわる．

尾瀬ヶ原の南には、菖蒲平（あやめだいら）とよばれる湿原さえあるが、尾瀬一帯にはハナショウブやアヤメのように乾燥地に野生するものはなく、このなかまでは、湿地産の種類であるヒオウギアヤメとカキツバタがあるだけである。菖蒲平の名はキンコウカという黄色い花を穂につづって咲く草の葉が、ややアヤメの葉に似るところから起った誤りといわれる。八月の中旬から九月にかけては、夏草はもはや残花となりかわって秋草のさかりとなるが、やがて日一日と冷気が膚に加ってくると、花はしおれて實となってゆく。その最後をかざるのが、釜っ堀のあたりに咲くオゼアザミ、エゾリンドウ、オタカラコウ、ウメバチソウの残花などである。秋は、九月の末から十月になり、湖畔の水に紅葉したナナカマドの影がうつる頃から、湿原はうらさびしくなり、紅

コバイケイ

カキツバタ

カキツバタは小沼のふちや尾瀬ヶ原に多く，時には浮島の上にも咲き出て人の目をたのします．ヒオウギアヤメと違い，茎に枝がない．

コバイケイソウは沼のまわりの湿原に多く，花は何年かに一度しか咲かないが，枝を打った穂の上に沢山つくから人目をひく．主茎の上の花のみ雌蕊をもち，枝の花にはないので稔らない．

葉の散る頃にはすっかり草の葉が枯れて狐色を呈し、十月半ばには雪にうもれてゆく。

尾瀬は氣候の上でいうと、太平洋気候が日本海気候に移ろうとする境にあたり、関東地方的であるよりは、むしろ東北地方に近く、森林植物をとっても、エゾマツのごときはその自生地は尾瀬から北海道までどこにもない。また動物でもことに昆虫には、北海道と共通のものが多いという。湿原の植物では、ここに写真をかかげたほかに、たとえば沼尻平（ねしりだいら）の湿原で見うけるヤチスギランは北海道の泥炭地には普通に生育しているが本州では珍品であるし、イワショウブなども、関東には見られず奥羽以北の山にのみある。

こうして尾瀬沼周辺の湿原の植物は、その湿原化の階梯を示す研究材料としてのみでなく、分布の上でも興味深い。

ヤナギトラノオ

ショウジョウバカマ

茎も葉も糸のようなイトキンポウゲは，高さ 5 cm にもたらず，人目をひかないが，稀な植物として珍重されている．茎は横ばいして節ごとに数枚の葉を生じる．

イチゲのなかまでもっとも小さいヒメイチゲは，通例亞高山帯の林内に生じるが尾瀬では水蘚湿原にも見る．初夏白い花をひらくが，花弁とみえるのは萼片である．

北海道の水辺などに見られるヤナギトラノオは，尾瀬がその分布の南限であろう．東京附近に見るオカトラノオに多少縁の近い草であるが，黄な花弁は細裂して形が大分違うので別属とする．

根から出た葉がかさなって袴にみえるうえに，冬はそれが枯れずに紅色を呈するのでショウジョウバカマの名があるこの草も，湿地をこのみ，湿原の上にも咲く．

イトキンポウゲ

ヒメイチゲ

尾瀬ヶ原を俯瞰すると、一大貯水池の候補に擬せられるのも、さこそと思われる光景であるが、その地質はかならずしも貯水池に適するものではないといわれる。地床は九〇パーセントの水分をふくむ水蘚で厚くおおわれる一大湿原であり、その間に大小幾百を数える池沼が、これを山上から見れば宝石をちりしいたように散在する。そのあるものは半メートルにもたらぬほど浅く、あるものは一〇メートルをこえる深さで、時に水草を浮し、浮島を浮べて湿原にも稀に見る特殊景観を形づくっている。

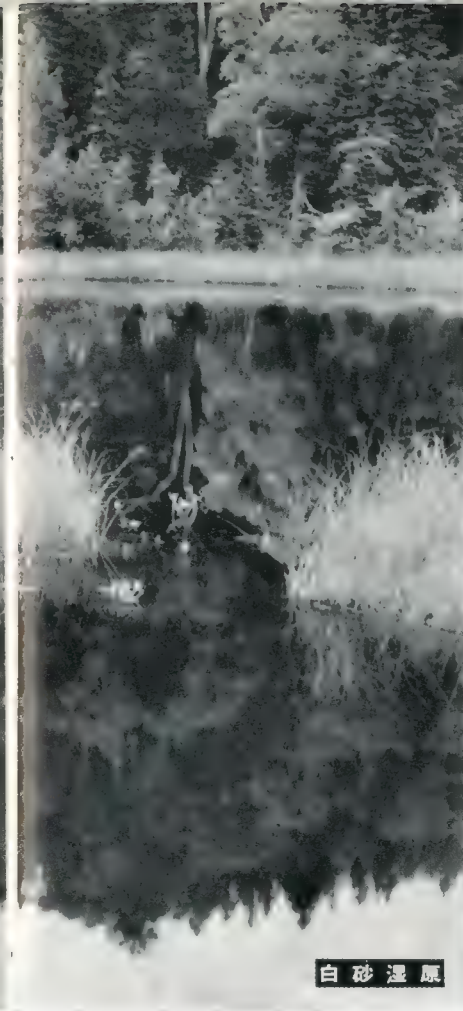
燧ヶ岳から見た尾瀬ヶ原

沼尻川の源頭

尾瀬沼の水は，沼の西端から沼尻川となって流れ出，只見川の源をなす．沼が水力発電の調節池としてつかわれているので，今はその流れ出る辺に水門ができたが，写真は昔の姿を示す．沼尻を西にすぎると，白砂とよぶ水蘚湿原があり，その大小幾つかの池に，あたりの林があざやかな緑の影を，さかさまにおとしている．

白砂湿原

尾瀬ヵ原へ

尾瀬沼の北岸につけられた路を、時には森林を穿ち、時には湿原を横ぎり、沼尻へ、さらに、沼尻川にそう道を下ると、半キロほどで白砂湿原に出あう。その入口で渡る清い流れが白砂とよばれるのでこの名があるが、湿原の池のほとりの美観は近年やや失われている。ここから一つ坂を越えると、あとは下り一方の道

を、時折泥土にすべりながら樹林の間をわけてゆくと、いつか落葉樹の数のふえてゆくのに気づくであろう。わけても初夏、まだ尾瀬沼の周辺には木の芽のほころびない頃この辺をすぎると、ブナの新緑が黒木の林と違って明るい感じを与える。魚止と俗称される小さな流れをこえ、いよいよ緩やかになる傾斜を、ブナやミズナラなどの大木に交ってカラマツが靜かに立っている木下道について下ると、やがて夢のようにはてしない原野が目の前にひらける。この原こそ尾瀬沼とともに尾瀬特別区域のかなめをなす尾瀬ヵ原で、また近年ここを水力発電のための貯水池として水底にほうむり去るか否かの賛否両論をまきおこした問題の地でもある。しかし今はなお昔ながらのおもかげもそのままに探勝の人を待って悠々と曠望千里の姿をひろげている。

上の大堀

沼尻川とは逆に，原の西南にあたる山すそから，小伝馬沢と広窪の沢を集めた上(かみ)の大堀は，牛首でさらに牛首沢を合せ，やがて猫川にそそぎ，上田代と中田代との境目をなす．

原の西北隅から流れ出た猫川は，満水の時には両岸にあふれるほどの水量で，うずをまいて流れる水はものすごく，所々で水流が二本にわかれている．これは6月満水期の景．

満水の猫川上流

沼尻川の中流

尾瀬ヵ原を貫流する川の中でもっとも大きいのは沼尻川で，その全流域にわたり両岸によく樹林が発達している．越場とよばれるここは，昔は倒木を渡って越したものである．

沼尻川はやがて猫川と合流する．大釣(おおつり)と俗称され，イワナのよく釣れるこの地点で，群馬，福島，新潟の三縣が境をなしている．原の水はことごとくここに集り只見川となる．

三縣の境

尾瀬ヵ原

一歩尾瀬ヵ原へ足をふみ入れると、はるか西空をかぎる至佛山（二二二八メートル）のふもとまで、六キロもつづいている広野が、普通の原野とは似ても似つかぬ水蘚湿原でかかとまでずぶずぶと埋ってしまうのに驚かされる。だが原へかかる一丁ほど手前の道を右にとって、森林をぬけてゆくと、尾瀬ヵ原温泉をへてたぐい稀な平滑の奔流と、直下一〇〇メートルにあまるという三条の瀑布に行くことができる。このあたりは、原の東北端を限る燧ヵ岳の熔岩が昔の溪流を堰止めて、まず、湖水を形成したものである。尾瀬ヵ原の西方を限る至佛山は、その脈を北に伸ばし、日崎山、すすヵ峯となり、一方北には大白沢山の東から景鶴山（二〇〇一メートル）をへて、松箟高山（与作岳）に至る火山脈が走っている。さらに、南面を限るのは菖蒲平一帯から富士見峠に連なる火山脈である。周辺の山はいずれも原よりも六〇〇メートル内外も高く、これらの生みだす水が集って、大瀑布をかけるのもさここそとうなずかれる。

平滑の滝

三条ヵ瀑

沼尻川が猫川と合流して赤川となり，北向するあたりから流れは急となる．奔流はかつてここを堰止めた燧ヵ岳の熔岩を洗い，基盤の花崗岩の露出した河床をほとばしって，ついに平滑の滝をなす．川ぞいの道がなかった昔は，浅瀬をえらびつつ，水晶簾の掛る間を選び，徒歩で渡ったものである

さらに下流には，水量華厳の瀑をしのぐという三条ヵ瀑が，さかんにしぶきを上げて落下している．

初夏の上田代

上田代には樹木が多く，初夏にはシラカンバの膚が，カラマツの若葉と照り映えて，その間にはミズバショウも咲きみだれる．はるか東方の燧ヵ岳には，まだ残雪がかがやく．

上田代の一隅，俚称山の鼻から北を望むと，ススヵ峯の尾根が空をかぎり，カラマツのほかにヒメコマツなどの針葉樹が行手に現れる．湿原は，傾斜地にもよく発達している．

上田代の山の鼻から北望

下田代の一部

至佛山の雪を倒に写す下田代の六兵衛堀右岸の大小の池沼には，浮島をただよわせるものもあり，池のまわりにはモウセンゴケの類などをはじめ多くの湿原植物を宿している．

中田代の流水は，泥炭層をくぐってしばらく姿を消しては又現れることがあるので，そこは龍宮とよばれている．夏のはじめ水辺にミツガシワが純白な花をつけた景観である．

中田代の龍宮

至佛山の中腹から鳥瞰した尾瀬ヵ原．正面に燧ヵ岳が裾を拡げ，その麓に尾瀬沼をたたえる．一面の湿原に帯のように見える林は，沼尻川やその他の河畔に発達した森林．

ミズスギナ

原の東端、旅舎のあるほとりから、至佛山のふもと、山の鼻と名づけられる地点を目ざして縦断を試みるなら、尾瀬ヶ原の全貌は、ほぼ明らかとなろう。進行をためらうほどの沼地をスゲの類などを踏みわけながら西に向うと、やがて六兵衛堀と呼ばれる細流が下田代を二分し、その上流は燧ヶ岳の裾の林に消え、下流は沼尻川に向って流れるのに出あう。両岸には土砂が沈積して、ミズナラ、ソウシカンバ、シラカンバ、ヤチダモなどの落葉樹が帯状の林をなしている。ここからは、やや高燥な地となり、沼尻川の右岸にそって発達した樹林にかかる。だが、川を渡れば再び広い湿原、左手に見える皮籠岩(誤称の川越岩)を境に、中田代に入ったのである。中田代は原をくぎる三区の中、もっとも広いばかりでなく、池沼の大きな、そして水深もゆた

ミツガシワ

ヒツジグサ

かなものが多く、浮島を浮かべる個所も少くない。浮島は多くは凹形をなし厚さは一メートル内外、スゲその他の草の地下茎と水蘚とからなり、カキツバタのような美しい草や、小さい灌木を宿して、青空の写る池に浮動している。

ミズスギナも，尾瀬に多い沼沢植物である．同じく水中に生えるトクサの一種で，ミズドクサに似ているが，ミズスギナには枝があって，スギナのような形をしている．日光湯本附近を南限とする．

ミツガシワも北方の植物で，青森辺では，溝のふちにも見うけられるが，あさい水中にも生育する．いわゆる宿根草で地下茎が水中をはっている．ヒツジグサはやはり尾瀬ヵ原の小池の中に見うける．

浮島の初期

浮島の生因はまだ十分に闡明されていないが，恐らくは池底に堆積した植物の残骸や泥土が，硅藻などによって緊縛され，それをメタンガスが剝離して浮上らせるのであろう．

それが水面ちかくまで浮上し，湿原植物の種子の足だまりとなれば，その根はさらに有効なバインダーとなって働くことになり，ついに水面に出ればさまざまのものが生える．

浮島の生成の一階梯

中田代から至佛山

至佛山の姿は尾瀬ヵ原の眺望には欠くことができない．下田代から望むと中景に沼尻川畔の樹林が入るが中田代から眺めるとやや姿が変る．初夏，まだ浮島は冬枯の姿である．

中田代の池は，浮島を浮べるものが多いが，中でも，原の南を限る菖蒲平(あやめだいら)の山脈から北にひらく伝之丞沢の扇状地を，背景とするこのあたりには，夢のように浮ぶ浮島が多い．

中田代の池沼（遠く伝之丞沢の扇状地を望む）

下田代の浮島

中田代は西にゆくに従って、一歩ごとに震動を感じるほど湿潤の度をます。動きの田代とよばれるのがこうした個所だ。このように広い原を一面埋めつくす水蘚の層は、いったいどのように形成されているのであろう。二十年ほど前中田代の中央を三メートルあまり掘下げて調べた結果は、全体が七層をなし、最上層一二センチまではミズゴケにヌマガヤなどの根茎を蔵し、第二層は三八センチまで、死滅した根茎とその下部に砂層をもち、泥炭化しつつある中にマツ、トウヒ、ツツジ三属の花粉があった。第三層はスゲ類の泥炭層で地下七三センチ位、下部には火成岩質の荒い砂層が重なり、第四層は粗質泥炭層で地下一三〇センチに達し炭化度が進み前出の花粉に他の属の花粉もまじり、甲殻類の遺体も発見された。第五層はスゲ類灌木泥炭層で厚さ三センチ、第六層は密質と疎質の泥炭夾在層で地下二二六センチに及び、密質層にはやはり花粉や甲殻類遺体が認められ、第七層に至ると密質灌木泥炭層で、二四〇センチ以下にはノリウツギに似た枝が沢山埋没していたという。

雪消の浮島

下田代の固定浮島

浮島には，いろいろの形や性質があり，右の下田代に見られる例では，その上にカキツバタがたくさん生えているが，浮島の浮泛力は十分ではなくカキツバタは，なかば水中に没して，立っている.

浮島は，雪や氷に押されて，冬は水底に沈んでいるが，５月雪の消えかかるとともに浮上してくる．下の例は，下田代に見る固定浮島で，その下部がすでに池底に固着して動かなくなったものである．

アサヒラン

ツルコケモモ

ヒメシャクナゲは水蘚湿原に多い小灌木で，高さは 20 cmほど葉は常緑で裏は白く，花は桃色だが，尾瀬では稀に白花もある．

ツルコケモモも常緑の湿原植物て，細い茎が匍匐し，コケモモに似てはるかに大きい実は，酸味はつよいが食用に供せられる．

サワランともいうアサヒランは，中部地方から北海道にかけ湿原に分布し，深紅色の花は美しく根には，小さい球をつけている．

ナガバノモウセンゴケは，日本では尾瀬ではじめて発見されたもの．この地を南限としている．

尾瀬ヵ原の植物

中田代にわけ入って間もなく小さい樹叢が細径のほとりにあって、その辺には、夏はカラマツソウ、秋はクロバナヒキオコシなどが乱れ咲いているのを見る。動ぎの田代をすぎ、上の大堀を渡ると、小さい池には、ヒツジグサやオゼコウホネが、可憐な花を咲かせている。初夏、ウラジロヨウラクが美しい紅色の花に人目をひき、ヤチヤナギの生えるのもこの辺が多い。最後に川上川を越すと、樹木も多くなり、川ぞいの地などにはカラマツやシラカンバも立ち、今まで歩きつづけた田代とは違った風景が展開する。そして二階建の山の鼻小屋に泥まみれの足を休めると、尾瀬ヵ原の縦断はひとまず終る。ここから道を猫川の上流に向けてとり、再び湿原を行くと左手は傾斜のある湿原となり、

ヒメシャクナゲ

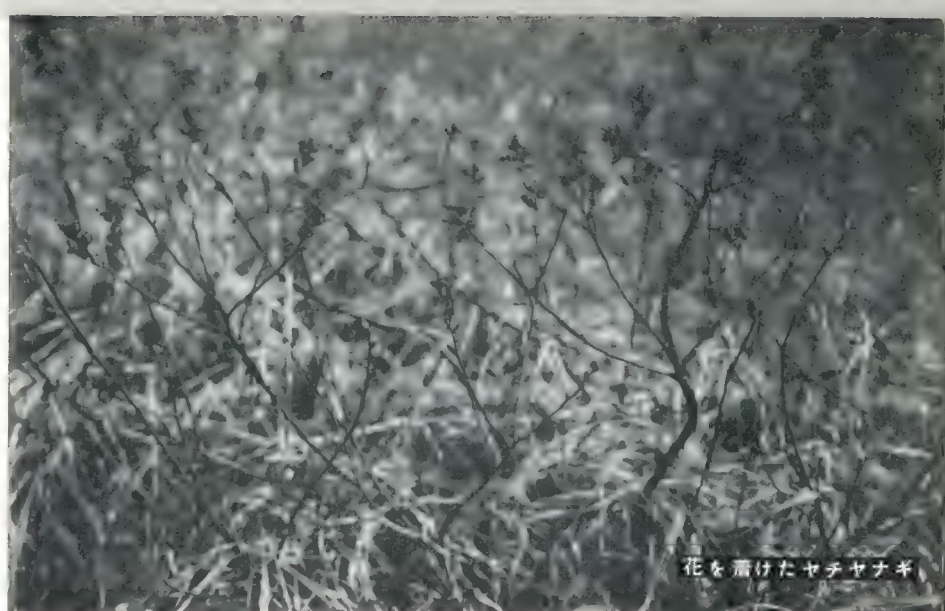
ナガバノモウセンゴケ

猫川に平行してカッキリ堀の細流があるが、この辺はオオバヤナギやコゴメヤナギの大木が多く、かつて柳平の名も与えられた。コゴメヤナギは幹の目通り周囲二五二センチを算したものもある。肥えた土地には巨大な草が生え、ある年の秋見出されたオオウバユリは、茎の高さ二三五センチ、三七個の果実をつけた穂が六五センチもあって、一と夏でこんなに生育するその力に学者も一驚したものである。山の鼻小屋から反対に南下して鳩待峠に向うと、川上川を渡って樹蔭に入いり、美しい林をぬって爪先上りの小径を一時間半ばかり、やがて眺望のよい峠に達する。樹下にはオオバキスミレが咲き、オオサクラソウの紅花の見られることもあるし、峠の明るい木立の中には、ムラサキヤシオツツジや、ニオイコブシの花が新緑に交って美しい。

ヤ チ ス ゲ

ヤチスゲも，その名のごとく谷地すなわち湿地に生えるスゲの一種で，本州東北部から北海道にかけての湿原に見られる．これに似てさらに分布の廣いのが下のゴウソである．

ゴウソとともに生えているホロムイソウは，はじめて北海道ホロムイ泥炭地で故堀正太郎氏が発見した湿原植物で，尾瀬を南限とする．堀氏にちなみ，ホリソウともよばれる．

ゴウソとホロムイソウ

花を着けたヤチヤナギ

ヤチヤナギは，葉がやや柳を思わせる湿原植物であるが，実はヤマモモに縁をひくもので高さは1m以內．雌花と雄花とは株を異にし，初夏に葉のまだ伸びぬうち花をひらく．

果実は葉のかげにかくれて着き，緑色で，多数が毬状をなしている．この分布の南限は三河高師の原といわれるが，今日ではもはやその地には絶えたと思われる貴重種である．

ヤチヤナギの実

下田代のチングルマ

長径六キロ、短径二キロ半のこの類のない大湿原の植物群落は、まことに錯雑をきわめ変化そのものの姿を示して、植物学上、生態学の宝庫といわれる意義が何人にもうなずかれる。この湿原に移動する植物群の生成、発展、また死滅の推移が、随所に眼のあたり見られることは、ややもすると植物界、ひいては自然界を一つの固定した枠の中にはめてしまい、静止したものとして考えがちな私たちに多くの反省を与えてくれる。数本の植物、数種の草木であれば、これを実験室で栽培して、生活史や環境に対する適応性などのいろいろな現象をさぐることもできよう。しかしこのように多種多様な植物群が大規模な湿原に、千変万化をなす天然環境の中におかれているのを、目のあたり研究しうる地は、狭い日本の中ではまたと見出すことができない。

サギスゲ

キンコウクワ

尾瀬に珍しい植物が多いと知る人にもそれを大きな標本室か植物園のようにしか考えぬ者が多いが、そうしたいわば固定した陳列棚のようなものとは違った自然の活動そのものが現実にここには存在することを見逃してはならない。

バラ科に属する矮小灌木のチングルマは，中部地方より北の高山で，水湿のゆたかな地に生えるが，尾瀬のように水蘚湿原に生育するのは異例である．

サギスゲは，ワタスゲに似るが，一茎一穂ではなく，茎の先端がいくつもの枝を分かち穂をつける．

キンコウクワは中部地方以北の湿地に多い多年草で，多湿の地ならば水蘚湿原でなくても生育する．

ハイマツ

イワウメ

燧ヶ岳

周囲の山と尾瀬の地史

尾瀬ヶ原が今日たえず行っている"運動"についてはすでにその概略を見てきた私たちだが、では、この原が成立するまでには、どのような自然の変動があったのだろうか。それはむしろ、まだ若いこの大湿原を、しずかに見下す周囲の山々が答えてくれよう。この地帯の地史を探ると、広く基盤をなす最古の岩石は、秩父古生層に属し、尾瀬ではこれが至佛山の中腹以下から、その北の日崎山にかけて、またさらに景鶴山の中腹以下に露出している。その褶曲して西北へ傾斜している地層の中に、中世代になってカンラン岩や花崗岩質火成岩が、熔融状態ではまりこみ、地表下の深いところで凝固している。至佛山の中腹より上にみられるカンラン岩はこれで、この山の山稜が、突兀たる形を呈するのも、カンラン岩が強靭で侵蝕を受けにくいためと、東西両側の断層によって生じた地塁である。また、花崗岩は平滑の滝の附近に見られ、このあたりでは一番最後まで活動した燧ヶ岳が、西の方に流した熔岩の下に横たわる。

二重式コニーデ火山である燧ヶ岳は再三の爆発や侵蝕によって，外輪壁が四つの峯にわかれ，内円錐は浅い火口湖を抱いて，御池岳とよばれている．

山頂附近一面に繁茂しているハイマツは，その名のごとく幹が屈曲して這い廻り，枝が枯れて空隙が出来ればコケモモなどが侵入して生育している．山頂の岩壁に生えるイワウメは，7月にウメに似た花を厚い葉のあいだから開く，矮小灌木である．

景鶴山のヌウ岩

景鶴からみた燧ヵ岳

景　鶴　山

第三紀中新世にいたって、石英粗面岩の流出があり、この近くでは鬼怒沼山一帯から尾瀬峠南面にかけてはこの流出をうけた。ついでくる第四紀に尾瀬沼の東岸、檜の高山から大江山、沼山峠にかけて安山岩が噴出し、つづいて皿伏山から菖蒲平にかけての、尾瀬の南限を形づくる一帯の火山が噴出した。こうして至佛山のすそに連る尾瀬ヵ原の南側ができ上った後に古生層をつらぬいて噴出したのが、いまは死火山の景鶴山である。そしていよいよ最後の仕上げが近づく。それを敢行したものこそ燧ヵ岳で、これによって現在の尾瀬沼と、さらに一つ、現在尾瀬ヵ原と化した湖とが、その熔岩に堰止められて生れ出たのである。尾瀬沼は、かつては現在より五メートルほど水位が高く、小沼とつづいていたものであろう。その水があふれて西に流れ、沼尻川となり尾瀬ヵ原にあった湖に入り、その水を合せて原の東北隅を突き、以前はおそらく檜枝岐川の上流をなしていたと思われるいまの赤川すなわち只見川本流の源流の祖先である。だがどうして湖が今の原になったのだろう。

景鶴山とは山頂から南へ向って流れる遣摺沢からなまって名づけられたものであり，その絶頂には火山岩がドームのようにそびえている．これを会津地方の方言ヌウ(ワラや薪をつんだもの)にちなんで，ヌウ岩とよびならわしている．藪の多い山腹を夏登ることは不可能であるが，冬はスキーを利用して，その肩まで達することができる．山頂近くから東を望むと，燧ヵ岳が沼から仰いだときとは全く異った姿でそそり立つのがながめられる．

至佛山最高点

中田代の西端から見た至佛山

秋の至佛山

旧尾瀬ヵ原湖は、まわりをかこむ山岳から流れ下る土砂や燧ヵ岳が次々とおこす噴火の降灰などで埋りはじめるとともに、赤川の侵蝕で水位も低下してきた。そこへ湖岸から手を伸し、ついにこの周囲数里に及んだ大湖に止めをさしたものこそ、あの可憐なクロバナロウゲやミツガシワのごとき沼沢植物だったのだ。すでに私たちが、尾瀬沼の北岸で彼らが活動しているのを知ったように、その進出はいつしか棚状の浮島となり、その上につもった枯葉や泥土には水蘚を生じ、次にはスゲの類やホロムイソウのような湿原植物を宿し、さらに水蘚の層は厚みを加えていって、ついに何時の日か、湖の全面をおおって湿原と化してしまったものに違いない。尾瀬ヵ原はこうして湿原となった。しかも、そのある處では水蘚層は深く湖底に達し、そうした場

所は比較的かたく乾いたろうし、またあるところでは動ぎの田代のように、今なお自らが鎖した水面上に半ば浮んで震動する所もあり、あるいは一部に湖の名残りの池も残した。そして今この歴史のいとなみは静かにつづいている。

至佛山の脈は，尾瀬地方で最古の古生層について生じたもので，そのカンラン岩からなる岩膚の露出が，赭褐色にみえる．至佛山の名も，昔，この山へ登るのにたどった澁っ沢のなまりだというが，その澁っ沢の名はこの岩の色にちなむものである．

この山脈は，尾瀬と利根奥とを分つもので，ここを境に，尾瀬沼や尾瀬ヵ原の水は日本海にそそぎ，逆の側は利根川にあつまって太平洋へ向ってゆく．

至佛山頂の植物相

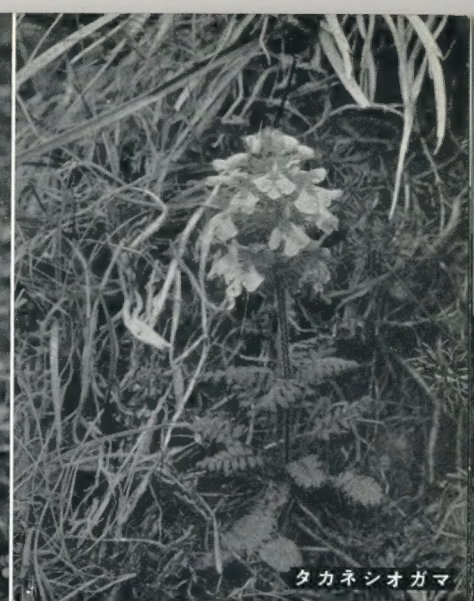
至佛山の頂上には，ハイマツがのびひろがり，その間隙に他の草木が雑居するが，ここには高山に通有のコケモモやガンコウランが多くみえ，その間にアカツゲが覗いている．

やはり頂上近いハイマツの間にのぞいているミヤマネズや，ハクサンシャクナゲ．アカツゲは顏をみせていない．この山には珍しくも，アズマシャクナゲが山頂近くに生える．

至佛山頂の灌木群

サンカヨウ

至佛山のふもとをはじめ，尾瀬ヵ原周辺の樹蔭や，沼のほとりに多い，白花の多年草．

至佛山のふもと，鳩待峠の辺に生ずる本邦特産の種類で，花は濃い紅をなし，美しい．

オオサクラソウ

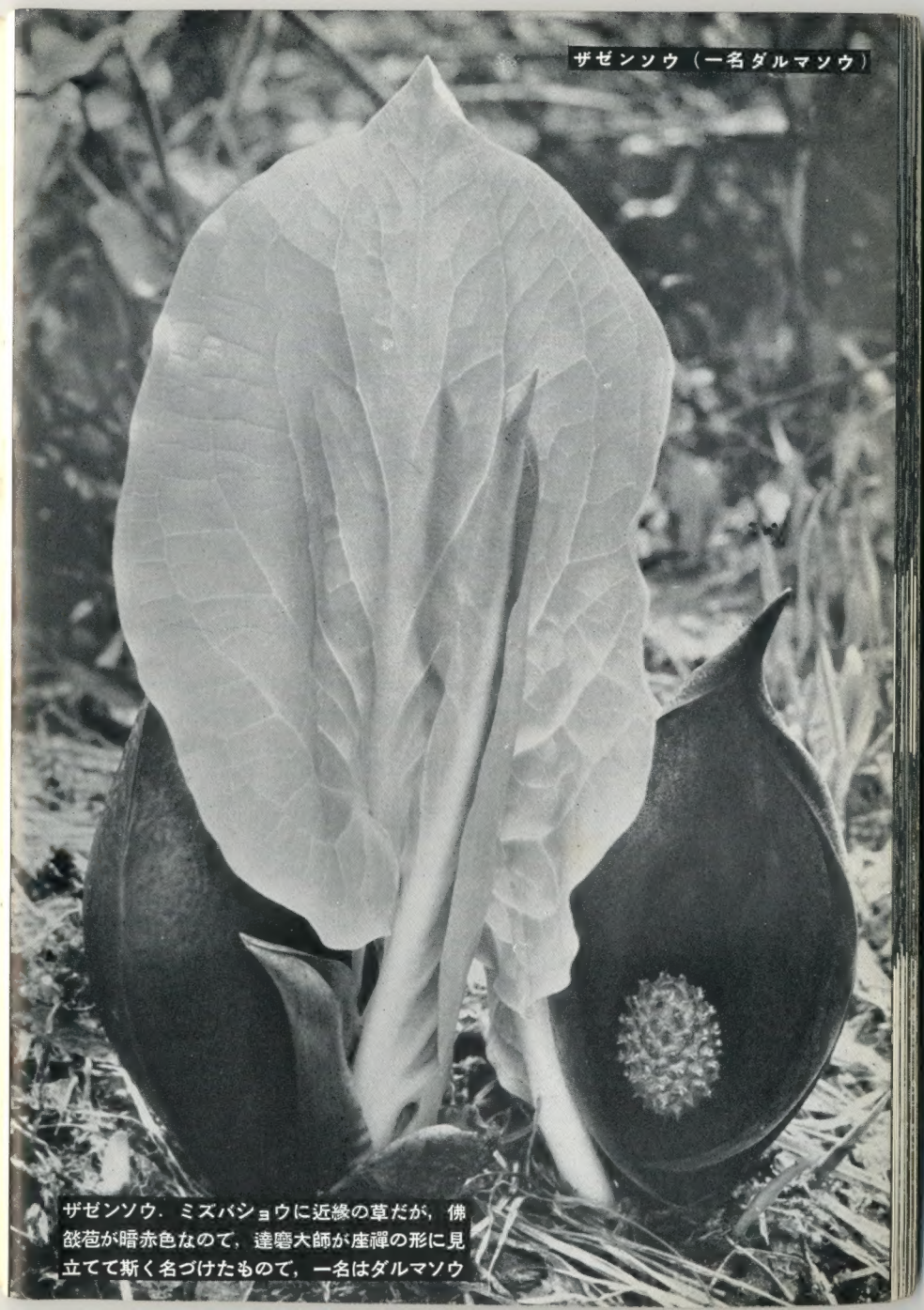
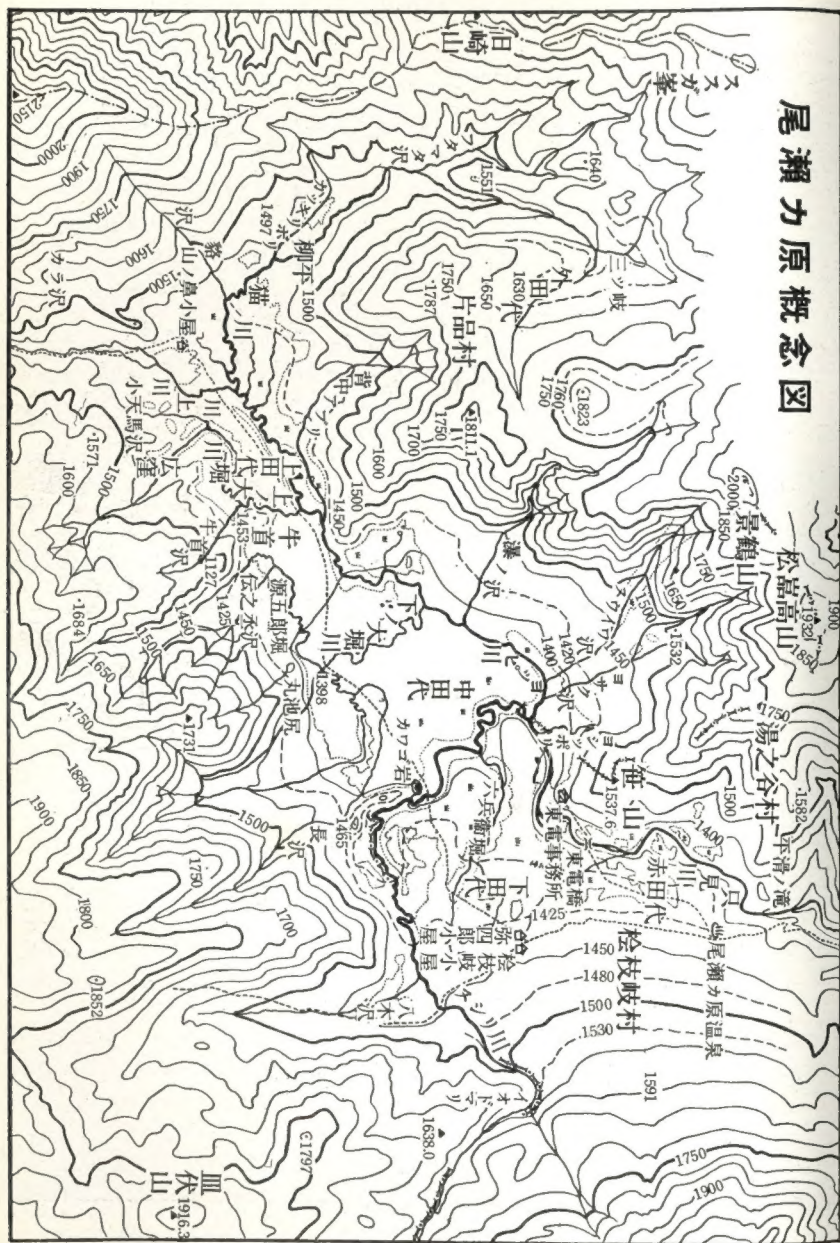
タカネシオガマ

本邦では分布の廣くない種類の植物で，日本アルプス一帶以外には見ること稀である．

日本特産．ヒナウスユキソウの葉のせまいもので，これもまた，稀にみる種類である．

ホソバヒナウスユキソウ

尾瀬カ原概念図

ザゼンソウ（一名ダルマソウ）

ザゼンソウ．ミズバショウに近緣の草だが，佛餤苞が暗赤色なので，達磨大師が座禪の形に見立てて斯く名づけたもので，一名はダルマソウ